



Title	2025年のツエルゲル、「地域からの地域研究」の胎動：設立100周年を迎えたバヤンホンゴル県ボグド郡を2度訪問して
Author(s)	今岡, 良子
Citation	モンゴル研究. 2025, 34, p. 1-24
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103472
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《調査報告》

2025年のツェルゲル、「地域からの地域研究」の胎動

— 設立100周年を迎えたバヤンホンゴル県ボグド郡を2度訪問して —

今岡 良子

筆者は、1989年に「日本モンゴル共同遊牧地域調査隊」の一員として初めてバヤンホンゴル県ボグド郡を訪ね、1990年から1994年にかけて「日本モンゴルゴビ遊牧地域研究開発調査（以下、「ゴビプロジェクト」と略す）」の隊員として、1995年以降は一人で毎年訪問してきたが、コロナ禍で中断し、最後に訪れたのは2019年となった。コロナの感染拡大を封じるためにとったモンゴル政府の国境閉鎖は非常に素早く、その後、新型の株が豹変する度、国境の開閉を気にしなければならなかった。モンゴルに渡航できない間、女性史家 E. チメッドツェレンの著作の翻訳に集中し、ウランバートルで開かれる国際モンゴル学会議やモンゴル国立大学内の学術会議でその内容を発表するにとどまった。昨年2024年は、ボグド山が見えるところまで近づきたいと思い、オンギ川のスタディーツアーに参加し、ウムヌゴビ県のオラーン湖からオンギ川に沿って遡り、ドンドゴビ県、ウブスハンガイ県の源流地域の近くまで移動した。遠くから東ボグド山の方を見て、山頂の冷涼な夏営地を思い出すにとどまった。

しかし、そのリバウンドのように、2025年には、2度、ボグド郡へ行く機会を得た。1度目は、5月にボグド郡設立100周年記念に向けた学会がボグド郡中心地で開かれ、31人の研究者がウランバートルから現地入りする一行に加えていただいた。しかし、郡の中心地から東ボグド山を眺めるに終わり、どうしても東ボグド山ツェルゲルに行きたいという思いを強くした。2度目は、8月に、首都、県や郡の中心地で知人に支えられて、ツェルゲルまで辿り着くことができ、夏営地で遊牧している人々と再会を果たすことができた。5年ぶりであった。

本論では、その2回の訪問の報告をまとめ、地域から地域研究が始まっていること、それに関連した出版された書籍を紹介する。

（1）2025年5月の訪問（4月28日から5月6日まで）

（1.1）経緯

5月のモンゴル行きは、前年の10月25日から30日にウランバートルに滞在したことがきっかけになる。

2024年10月29日にモンゴル国立大学の図書館ホールで、女性史家 E. チメッドツェレン生誕100周年記念の学術会議と出版記念会が開かれることになった。筆者は外国人で、チメッドツェレンの本の翻訳をしているということで招待され、チメッドツェレンが、党50周年記念の『モンゴル人民共和国における女性解放の歴史』という本を執筆するため、当時まだ名誉回復されていなかった D. パグマドラムについて詳しく調査し、そこに記述したことの意義について発表した。ご遺族や弟子で、ホールはいっぱいになっていた。

図1 E. チメッドツェレン生誕100周年記念
の招待状



図2 出版記念会の招待状



モンゴル女性組織設立100周年記念にモンゴルの女性組織が発行した雑誌をキリル文字で再発行した。

チメッドツェレンがその本の中で使ったモンゴルの女性組織の雑誌(1925年から1936年にかけて発行されたもの)が、国立文書館だけでなく、国立図書館や個人宅に散在していたので、B. トゥブシントウグス(現在大阪大学人文学研究科特任教員、モンゴル国立大学教授)が収集し、そこに書かれたモンゴル文字の文章をキリル文字に転写する作業をモンゴル国立大学の院生が分担し、一冊の本を出版した。その出版記念会をチメッドツェレン生誕記念の学術会議の前に開催した。そこにはゴビプロジェクトの時代からお世話になったT. ムンフツェツェグ(モンゴル国立大学名誉教授)が参加し、出

版記念会は女性史に関するものだが、今岡のこれまでの調査研究は、40年を迎えようとするボグド郡における遊牧社会の調査研究である、と紹介してくれた。

その時に知り合ったのが、S. ボルドバートル(モンゴル国立科学技術大学社会人文学部教授)で、同じバヤンホンゴル県のジンスト郡出身だと言う。この写真のS. ボルドバートルが、声をかけてくれて、5月のボグド郡での会議に参加することができた。モンゴルの社会は、こういう繋がりが次の扉を開いてくれることがある。

写真1 S. ボルドバートルと筆者



2024.10.29. 撮影 S. ボルドバートル

実は、ボグド郡の会議には、他にも外国から zoom で発表する人もいるということで、筆者もそうするだろうと思われていた。しかし、筆者は何としてもボグド郡に行きたかった。7月のナーダム頃の100周年記念には授業があるため参加できないので、その前の5月に行って、お祝いを述べたかった。この時期なら、4月末からゴールデンウィークが始まり、大学あげての大学祭が行われるので授業が休講になる。筆者にとっては5年ぶりにボグド郡に行けるチャンスであった。一緒にボグド郡に行きたいと申し出ると、大歓迎された。

モンゴル人民共和国宣言が1924年であるため、昨年の2024年から地方の各地で地方行政設立100周年記念が行われ、ボグド郡は2025年に100周年を迎えることになった。1995年の30年前の70周年記念の時は、7月のナーダムを普段より盛大に祝って楽しんでしたが、今回は、その2ヶ月前に、学術会議が開催されることになった。そのテーマは、「ハルハ・サイン・ノヨン・ハン盟エルデネ・バンディ部ラミン・ゲゲーンの弟子とバヤンホンゴル県ボグド郡」という。

(1.2)「ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部エルデネ・バンディ部旗ラミン・ゲゲーン・シャビとバヤンホンゴル県ボグド郡」学術会議の概要

この学術会議を発案したのは、研究機関ではなく、ボグド郡行政でもなく、ボグド郡の住民であった。ボグド郡だけでも38年に渡り、数学や物理の教育者として貢献したI. チャグナードルジ(北極星勲章受賞者¹⁾)と妻J. ドラム、そして実務は高等教育を受け、ウランバートル在住の4人の娘、セムジッド、ハンドマー、ボンサルドラム、レンツェンハンドが担当し、それぞれの子どもたちがよく動いてサポートした。このように、住民が必要と考え、企画実施された学術会議が開催された意義については、改めて後書きたいと思う。

学術会議開催の目的は、ボグド郡は全国的に見ても、研究者を多く輩出した郡である。100周年記念の祭りを盛大に行うだけでなく、このボグド郡で生まれ、教育を受け、モンゴルの科学技術の発展に貢献した先輩たちの功績を修学中の若い人たちに伝えておきたいということであった。だから、首都ではなく、首都から700km離れたボグド郡で、そして、その中心の文化会館で、子どもからお年寄りまでに開かれた形式で学術会議が開催された。

5月1日7時、ウランバートルのスフバートル広場の長距離バスの出発地点に集合したのは、報告者の31人とチャグナードルジとドラムの一家であった。そのバスは、首都から西へ向かい、ウブスハンガイ県都アルバイヘルを過ぎたところから南下し、ボグド郡を目指した。ボグド郡の中心地にはトゥイン川がオログ湖に注ぐ寸前の下流が流れていて、降水量の多い年はトラクターでジープを引っ張らないと渡れなかったが、新しいコンクリート製の橋ができていた。橋の手前には、郡の代表が乗るジープがライトを照らして待機していて、私たちのバスに乗り込み、乳製品を振るまい、歓迎してくれた。その後、簡易宿泊所に泊まる人、知人の家に向かう者、それぞれ分散して、およそ700kmの10時間を越える旅を終えた。

1) 2015年、バヤンホンゴル県の発展に貢献した48人に労働赤旗賞、北極星賞を授与したリストにI. チャグナードルジの名前がある。<http://khural.mn/n/83655#!> 2015年12月28日付け

写真2 ボグド郡に向かう発表者ら



2025.05.01. 撮影 S. ボルドバートル

会議の発表者は、31人。モンゴル国立大学、国立科学技術大学エネルギー工学部、地質学・鉱学部、社会人文学部、モンゴル国立教育大学、国境防衛本部、諜報本部、考古学研究所、天文・地質学研究所、植物研究所などに所属し、歴史学、考古学、人文学、社会学、地理学、文化、芸術、地化学、地震学、化学、植物の保護、自然環境の保護などを専門としている学者、そして、日本から筆者であった。ボグド郡出身の研究者がボグド郡について自分の専門から発表したり、ボグド郡出身の研究者の功績を後継者が発表したり、ボグド郡に関するテーマについて研究している専門家が発表した。

ボグド郡で生まれ、郡の中心地で教育を受けた後、ウランバートルで高等教育を受け、モンゴル社会を牽引する科学者になった人としては、文芸評論家の S. ロブサンワンダン (1932年生まれ。ゴビプロジェクトの発案者)、化学の基礎を築いた J. アムガラ (1939年東ボグド山生まれ)、「私の母はラクダ飼」で有名な作曲家芸術功労者 Ch. サンギドルジ (1939年生まれ)、地質・鉱学の J. ビャンバ (1940年生まれ)、教育学の L. ジャムツ (1940年生まれ)、砂漠地理学 T. バーサン (1944年生まれ。ゴビプロジェクトの参加者)、モンゴルで最初の人類学者 D. トゥメン (1946年生まれ)、自然環境学、環境省副大臣の Ts. シーレブダンバ (1954年生まれ) について後継の研究者が報告した。骨の研究で有名な人類学者 D. トゥメン は、今回の学術会議の参加者でもあった。名前に下線を引いた人は、ボグド郡の百周年記念に郡が発行した『イフ・ボグドの人々』にも掲載されている。

(1.3) 「ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部エルデネ・バンディダ旗ラミン・ゲゲーンの弟子とバヤンホンゴル県ボグド郡」という学術会議の特徴

筆者が初めてモンゴルを訪問したのが、日本とモンゴルの研究者が参加する共同調査であり、1990年に始まったゴビプロジェクトにおいては、自然科学者が多く、社会科学の参加者が少なかった。その背景には、党が方針を示した範囲内での研究テーマという点では自然科学も、社会科学もよく似た状況にあったが、社会科学の方が政治的制限を強く受け、国立古文書館等が現在のように自由に利用できず、地方での調査研究には費用がかかる当時、社会科学者が、自らテーマを選び、真理の探究を

通じて国民の目を開く知的活動をする状況になかった。また、首都ウランバートルと地方遊牧社会のインフラの格差は大きく、地方の地域社会のために研究する意欲が湧きにくいことも、ある意味仕方がないことだと考えていた。

しかし、35年も経つと、状況も変わり、研究者も、研究対象とされてきた人々も、意識が変わった。研究者は、国立古文書館の情報公開が進み、地方の調査に必要な研究費を得られるようになり、その研究成果を当該地域の住民と供給したい。ボグド郡出身者や住民は、100周年を記念に、改めて自分たちの地域社会の歴史を知りたい。故郷を離れて、県の中心地や首都、外国に住む子どもや孫の世代にも聞かせておきたい。そのような両者の希望は、今回の発表テーマに表れている。紙面の都合上、その全てを紹介することはできないが、3つの特徴を紹介したい。

1つ目の特徴は、ボグド郡を1925年以降の100年の歴史、それによって区切られた行政区画の範囲で考えていないということである。

この学術会議の名前は、「ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部エルデネ・バンディダ旗ラミン・ゲゲーン(ロブサンダンザンジャンツァン)の弟子とバヤンホンゴル県ボグド郡」というテーマである。ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部のエルデネ・バンディダ旗の位置は、図3の赤いところで、図4の現在のバヤンホンゴル県の北からエルデネツォグト郡、ウルジート郡、ボグド郡、バヤンゴビ郡にあたる。

ラミン・ゲゲーン(ロブサンダンザンジャンツァン)は、ウンドウル・ゲゲーン・ザナバザルの弟子であった。1639年に生まれ、5歳で仏門に入り、17歳の時、チベットで学び、第5代目のダライ・ラマの弟子となった。哲学や文学、天文学や医学に長け、特に、東洋の学術、特に伝統医学に力を入れ、

図3 ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部のエルデネ・バンディダ旗の位置



出典：Д.Мөнх-Очир(2025), Сайн ноён хан аймгийн Эрдэнэ Бандид Хутагтын шавь(Ламын гэгээнийхэн, УБ) の表紙

図4 現在のバヤンホンゴル県の地図上のエルデネ・バンディダ旗の位置



出典：Д.Мөнх-Очир(2025), Сайн ноён хан аймгийн Эрдэнэ Бандид Хутагтын шавь(Ламын гэгээнийхэн, УБ) の裏表紙

モンゴルで初めて医学の学校を設立した人であった。

17世紀に学識豊かな高僧ラミン・ゲゲーンが生まれたサイン・ノヨン・ハン部エルデネ・バンディダ旗、その宗教的祭祀は、古来信仰の対象としてきたイフ・ボグド山で行われた。このような歴史と文化のあるボグド郡が、100年前に設立され、その弟子とも言える多くの学者を生んだ。100周年を記念し、その成果をボグド郡民、若い人々と共有するのだという意気込みが伝わってくる学術会議のタイトルである。

筆者が、初めてボグド郡を訪問した頃、郡の代表は、郡の面積、人口、家畜頭数と話を進め、ラミン・ゲゲーンのことも、エルデネ・バンディダ旗のことに触れなかった。ましてや、最初の医学の学校が設立されたことも語らなかった。もし、そのことを知っていれば、その歴史の文脈の中に位置付けて、東ボグド山ツェルゲルの遊牧民が学校を切望し、1993年に分校が設立したことを小貫雅男が書いていたであろう²⁾。

2つ目の特徴は、発表者は、国立古文書館等の資料をもとにしたボグド郡の歴史を住民と共有しようという意欲に満ちていたということである。

今回の学術会議のトップを飾ったS. ユンデンバト(国立文化芸術大学、文化功労者)は、「ラミン・ゲゲーン(エルデネ・バンディダ旗)の歴史とイフ・ボグド山の宗教行事の伝統」というテーマで報告した。彼は、ゴビプロジェクト発足時の協力者であったが、当時、ボグド山に関する伝説や宗教行事の話をすることはなかった。

D. ロブサンドルジ(国立教育大学、歴史学)はエルデネ・バンディダ旗の領地の範囲について、D. ムンフオチル(学術功労者、歴史学)は、エルデネ・バンディダ旗の1925年の人口について、Kh. ムンフバヤル(国立科学技術大学社会人文学部、歴史学)はエルデネ・バンディダ旗からどのように行政区画を変更し、ボグド郡を編成したか、そのプロセスについて報告した。

Sh. ナサンバト(諜報センター研究員)は、1930年代のラミン・ゲゲーンの弟子たちに対する粛清について、N. ダワードルジ(国境警備軍国境史研究員)は、ハルハ川戦争に参加したボグド郡出身兵士について報告した。Kh. バトエルデネ(国立中央文書館研究員)は、1940年から1957年、つまり、ネグデルが設立される前の牧民経営の実態を発表した。

1990年代初めに行ったゴビプロジェクトは、遊牧民が自分の住む地域社会をどのように変えていきたいか、という主体性に主要な関心があり、東ボグド山ツェルゲルでヘセグ長B. バドツェンゲルを中心にした地域おこしの活動を知り、ボグド郡を定点調査地域に選んだ。ラミン・ゲゲーン(ロブサندانザンジャンツァン)の存在を知らず、それとは関係なくボグド郡を選んだのだが、ボグド郡出身の学者が多いこと、遊牧民が分校設立を実現させたことなど、ラミン・ゲゲーンとの関わりから解き明かす必要を痛感した。

筆者らの社会研究班は、農牧業ネグデル改革とその後の解体、独立遊牧民家族経営によるホルショーの設立の動きを把握することで精一杯であった。社会主義の時代、モンゴルで禁止されていた宗教活動や非科学的であると評価されなかった地域レベルでの神話や伝説について丁寧な聞き取りができなかった。ましてや、30年代の大粛清の問題やハルハ川戦争の兵士のライフヒストリーなども、手を伸ばせる状況にはなかった。

ボグド郡はいったいどこにあるのか？ボグドという名前の由来は何か？という地域研究の基礎とな

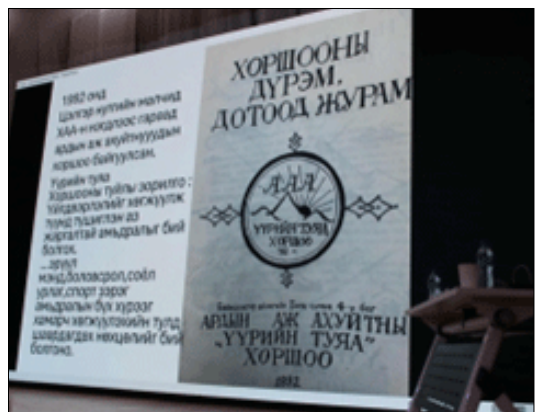
2) Ламын гэгээний хийд <https://montsame.mn/mn/read/222942>

る問いを古文書の資料や地図を示しながら次々と報告され、2日間の30を越える発表に退屈する暇はなかった。これまで様々な学術会議に参加したが、こんなに面白い学会に参加したのは初めてであった。やはり、地域を共有し、それぞれの専門から研究者が語ることで、内実を持った総合研究が成立する。まるで、夢を見ているかのような2日間であった。

(1.4) ボグド郡の学術会議の終わりに

ボグド郡で長年郡長など郡行政を指導してきた O. ドラムドルジは、妻の I. ヨンドンダシとともに、現在はウランバートルに住んでいる。夏の間は夫婦でボグド郡に帰り、郡中心地からそう遠くない夏営地にゲルを立て、家畜の世話をし、乳製品を作り、冬の食料の準備をする。今年はボグド郡設立 100 周年記念のナーダムもあり、忙しい日々を送っていた。彼らはウランバートル西部のトルゴイトからバスに乗り、会議の二日目に登壇し、「この学術会議が新しい始まりになる」と締め括った。筆者もそう思った。確かに、これはボグド郡における新しい地域研究の始まりである。

写真3 ボグド郡の文化会館で開かれた「ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部エルデネ・バン
ディダ旗ラミン・ゲゲーンの弟子とバヤンホンゴル県ボグド郡」学術会議の様子



(1.5) 5年ぶりの再会

筆者は、この学術会議のプログラムが示すように、発表の時間を2度いただいた。しかし、発表者の熱のこもった話は時間をオーバーし、時間通り進まないため、司会者に2回分の発表をまとめて、2回目に話すことを伝えた。すでに、配布資料は日本で印刷して持ってきていたので、1回目の発表内容は読んでもらうことにした。

2回目の時間に話した内容の要点は次のようになる。

まず、1989年から1998年まで、ボグド郡東ボグド山ツェルゲルにおいて、農牧業ネグデルを解体し、独立遊牧民家族経営によるホルショーを設立したプロセスを共有した。最近「ホルショー」という言葉がよく聞かれるようになったが、それは資金を貸し出す金融面の活動をするホルショーのことである。ツェルゲルで設立されたホルショーは、分校を設立し、それをともに支えることを軸に展開していたので、分校が閉鎖されるまでは、市場経済の波をなんとか乗り越えていたと考えている。ツェルゲルの遊牧民が考え、議論し、生み出したホルショーとは何だったのか？それをもう一度思い出してほしい。司会者にホルショーの規約をモンゴル語で読み上げてもらい、小貫雅男監督のドキュメンタリー映画「四季 遊牧—ツェルゲルの人々 1992年秋から1993年秋まで—」の最後に一年間を回想するシーンを10分ほど見てもらった。そして、ウーリントヤ（曙光）ホルショーがモンゴルにおいて先進的な存在であったこと述べた。

文化会館に集まった人の中には知人³⁾の顔もあった。郡中心地に家を構える知人(故トーフグイの妻ロギオ、故トーフグイの妹で、故ドンドブの妻のゲレルマー、故トゴバトの妻、故ダシニャム医師の息子、ツォグウォーら)、中心地に母と学童が住み、東ボグド山中には父と年長の子弟が住んでいる知人(今は県の中心地に住むダンバの次男ガナーの妻)、東ボグド山での仕事を放っておいて、会いにきてくれた知人(故サンダンホルローの娘シュレーと夫のシャグダル)がいて、筆者の発表を聞いてくれた。映画「四季 遊牧」の最後の回想シーンには、会場から笑ったり、驚いたり、大きなリアクションがあった。1992年秋から1993年秋にかけての思い出深いシーンを見て、もっと映画を見たいという要望があった。この映画は小貫雅男が100時間以上様々な家族を撮影したが、映画としては、バトツェンゲル家、フレルトゴー家、アディヤスレン家、サンギツェベグ家を中心に、ネグデルから離脱し、ホルショーを結成することを主な筋にして、伊藤恵子と一緒に7時間40分に編集したものである。当時の自分と家族が写っているはずだから、その姿を映像で見たいと言う希望が寄せられた。休憩時間だけでは旧交を温める時間が足りず、その日のプログラムが終わった後、知人宅を訪ねて回った。


筆者はボグド郡に来る前、ウランバートルで東ボグド山ツェルゲルのリーダーであったバトツェンゲルに会っていた。ウランバートルに住む次女ハンドからうちで双子の孫の世話をしてくれていると聞いたからだ。ボグド郡の学術会議で配布する発表の資料を渡し、意見を聞きたかった。バトツェンゲルは、資料に目を通し、「ロギオ姉さんがツェルゲルの歴史を本にしたいと言っていたが、これを元に書いたらいい。ロギオ姉さんにも手渡すように」と言った。

そのアドバイスの通り、郡の中心地に暮らすロギオさんを訪ねた。ロギオは「ボグド郡は100周年記念の歴史の本を準備している。東ボグドの私たちは、私たちの歴史を本にしたい」と言った。この言葉が、8月の訪問につながっていく。

3) 敬称の「さん」は一律つけないことにした。夫婦の場合は、筆者と付き合いが長い人を先に書くことにする。また、亡くなった方には、名前の前に「故」とつけることにする。

図5 「ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部エルデネ・バンディダ旗ラミン・ゲゲーンの
弟子とバヤンホンゴル県ボグド郡」のプログラム

**БАЯНХОНГОР АЙМГИЙН БОГД СУМЫН 100 ЖИЛИЙН ОЙД ЗОРИУЛСАН
ЭРДЭМ ШИНЖИЛГЭЭНИЙ ХУРЛЫН ХӨТӨЛБӨР**



**ХАЛХЫН САЙН НОЁН ХАН АЙМГИЙН
ЭРДЭНЭ БАНДИД ХУТАГТ ЛАМЫН ГЭГЭЭНИЙ ШАВЬ БА
БАЯНХОНГОР АЙМГИЙН БОГД СУМ**

Хурлыг санаачлан, ивээн тэтгэж, зохион байгуулагч:
Монгол Улсын Ардын Боловсролын Тэргүүний ажилтан,
Ахмад багш Иш-Осорын Чагнаадорж түүний гэр бүл, үр хүүхдүүд

2025.05.02 Баасан гараг

Өглөөний хуралдаан

08:00 Хурлын бүртгэл
08:30 Хурлын нээлт:
Монгол Улсын Хөдөлмөрийн баатар, Төрийн хошой шагналт Нацагийн Жанцанноров
“*Монгол аялзуу*”, Богд сумын бүрэн дунд сургуулийн Морин хуурын дугуйлангийн сурагчид,
Багш МУСТА, морин хуурч Мигдоржийн Түмэнбаяр

Хурлыг нээж үг хэлэх:
Баянхонгор аймгийн Богд сумын засаг дарга Лхагваагийн Ганаа
Ардын боловсролын тэргүүний ажилтан, ахмад багш Иш-Осорын Чагнаадорж

Хурлын дарга: Бямбаагийн Сэргэлэн ШУТИС-ийн Эрчим Хүчний Их Сургууль, доктор, профессор
Хурлын нарийн бичгийн дарга: Цэрэнбатын Банзрагч Монгол Улсын зөвлөх инженер,
ШУТИС-ийн Геологи Уул Уурхайн Сургуулийн докторант

09:00 Соном-Ишийн Юндэнбат – СУИС, Монгол Улсын Соёлын гавьяат зүтгэлтэн, доктор (Ph.D)
“*Ламын гэгээний шавийн түүх ба Их Богд уулын тахилгын уламжлал*”
09:20 Д.Мөнх-Очир – Шинжлэх ухааны Гавьяат зүтгэлтэн, Түүхийн ухааны доктор, профессор
“*Ардын засгийн үеийн Эрдэнэ бандид хутагтын шавийн хүн амын төв бүртгэлтэс*”
09:35 Х.Мөнхбаяр – ШУТИС-ийн Нийгэм Хүмүүнлэгийн Сургууль, Түүхийн ухааны доктор (Ph.D)
“*Богд сүм үүсэл байгуулагдсан нь*”
09:50 Д.Лувсандорж – МУБИС-ийн багш, магистр
“*Эрдэнэ бандид хутагтын шавийн нутаг дэвсгэрийг нутгийн зургаар тодруулах нь*”
10:05 Х.Бат-Эрдэнэ – Үндэсний Төв архивын Мэдээлэл дэвлэгааны төвийн ажилтан, магистр
“*Баянхонгор аймгийн Богд сумын ардын аж ахуйтнууд /1940-1957/*”
10:20 В.Эрдэнэчимэг – Баянхонгор аймгийн Архивын тасгийн дарга
“*Баянхонгор аймгийн Богд сумын түүхэнд холбогдох архивын баримт материалууд*”

10:35 Имаоко Рёко – Япон улс. Осака Их Сургуулийн Хүмүүнлэгийн салбарын дэд профессор.
“Говь төсөл ба Богд сумынхан 1989-1994 он”

11:00-11:30 Нийтийн зураг авалт. Цайны завсарлага

11:30 Шийрэвдоржийн Насанбат. Тагнуулын Ерөнхий Газрын ахлах ажигтан,
 аюулгүй байдал судлалын доктор (Ph.D), дэд хурандаа
“Ламын гэгээний шавиас хэлмэгдэгсэн зарим хүмүүс”

11:45 Юндэнбатын Болдбаатар ШУТИС-ийн Нийгэм Хүмүүнлэгийн Сургууль. Доктор (Ph.D), дэд проф.
“Богд сумын нутаг дахь археологийн дурсгалууд”

12:00 Ч.Баярсайхан, Л.Тунгалаг, Д.Хөнгөр-ШУА, Одон орон геофизикийн хүрээлэн.
 Газар хөдлөл судлалын салбар
“1957 оны Говь-Алтайн Гурван Богдын газар хөдлөлт”

12:15 Чагнаадоржийн Сэмжид. Онцгой Байдлын Ерөнхий Газар. Ахмад, магистр
“Газар хөдлөлтийн аюулаас урьдчилан сэргийлэх нь”

12:25 Бямбаагийн Сэргэлэн – ШУТИС-ийн Эрчим Хүчний Инженерийн Сургууль. доктор, профессор
“Богд сумд аялал жуулчлал хөгжүүлэхэд цахилгаан хангамжаар хангах боломжит шийдлүүд”

12:40-13:10 Хэлэлцүүлэг

13:10-14:00 Үдийн хоол /хотоос ирсэн төлөөлөгчид/

Үдээс хойшхи хуралдаан

Хурлын дарга: Юндэнбатын Болдбаатар ШУТИС-ийн Нийгэм Хүмүүнлэгийн Сургууль.
 Доктор (Ph.D), дэд проф.

Хурлын нарийн бичгийн дарга: Чагнаадоржийн Сэмжид Онцгой Байдлын Ерөнхий Газар.
 Ахмад, магистр

14:00 Н.Даваадорж - Хил Хамгаалах Ерөнхий Газрын Хилийн түүх судлалын секторын дарга.
 Хурандаа, доктор (Ph.D), дэд профессор

“Эх орны тусгаар төстнөл, хилийн халдашгүй дархан байдлыг хангах үйл хэрэгт БНМАУ-ын баатар Норпилийн Жамбаагийн оруулсан хувь нэмэр”

14:15 Доржготовын Отгонбаатар – Монгол Улсаас БНСУ-д суугаа Элчин сайдын яамны 3 дугаар
 нарийн бичгийн дарга, докторант

“Богд сумын анхны сэхээтэн ах дүү хоёрын тухайд”

14:30 О.Алтанзаяа - СУИС-ийн харьяа Соёл, урлаг судлалын хүрээлэнгийн судалгааны
 баримтын сангийн эрхлэгч. Доктор (Ph.D)

“Их Богдын хүү эрдэмтэн Сономын Лувсанвандан”

14:45 А.Пэрлээ-Ойдов - МУБИС. Доктор, профессор

“Шинжлэх ухааны Гавьяат зүтгэлтэн, Академич Жанцандоржийн Амгалангийн химийн шинжлэх ухаанд оруулсан хувь нэмэр, үнэт зүйл”

15:00 Г.Цэрэнханд доктор, профессор. Баярмаа. Магистр. Ботаникийн цэцэрлэгт хүрээлэнгийн
 ургамлын экофизиологийн салбар

“Шинжлэх ухааны доктор Цэрэндуламын Шийрэвдамбын ботаникийн ухаанд болон монголын байгаль хамгаалалд оруулсан хувь нэмэр”

15:00-15:30 Завсарлага

15:30 Соном-Ишийн Юндэнбат, Соёлын гавьяат зүтгэлтэн. СУИС-ийн Соёлын сургууль.
 Доктор (Ph.D), дэд профессор

“Монгол Улсын Урлагийн гавьяат зүтгэлтэн, хөгжмийн зохиолч Чойгивийн Сангидорж”

15:45 Баасангийн Банзрагч. Монгол улсын зөвлөх геологич, магистр

“Монголын геологийн салбарт Жамбын Бямбаагийн оруулсан хувь нэмэр”

16:00 М.Эрдэнэ МУИС-ийн ШУС-ийн доктор (Ph.D), дэд профессор, Ю.Болдбаатар, С.Бат-Эрдэнэ
 ШУТИС-ийн Нийгэм Хүмүүнлэгийн Сургуулийн багш. Доктор (Ph.D), дэд профессор

“Монголын антропологи, археологийн шинжлэх ухааны хөгжилд доктор, профессор Дагшээгийн Түмэнгийн оруулсан хувь нэмэр”

16:15 Должингийн Даш МУБИС, Газар зүйн тэнхим. Доктор, профессор

“Түүхийн Баасангийн монголын газарзүйн шинжлэх ухаанд оруулсан хувь нэмэр”

16:30 Т.Дуламагчаа – Боловсрол судлаач, МУБИС

*“Сурган хүмүүжүүлэх ухаан - боловсрол судлалын шинжлэх ухааны салбарын нэрт эрдэмтэн
Луухүүгийн Жамцын амьдрал, эрдмийн өв”*

Дурсамж уулзалт

16:45 Баянхонгор аймгийн Богд сумын иргэдийн тус сумд 1989-1994 онд хэрэгжсэн “Говь төсөл”-ийн судалгааны багийн гишүүн Японы Осака Их сургуулийн Хүмүүнлэгийн салбарын доктор, дэд профессор Имаоко Рёкотой хийх дурсамж уулзалт

17:30 Үг хэлнэ: Богд сумын Засаг дарга асан Одхүүгийн Дуламдорж
Ардын боловсролын тэргүүний ажилтан, ахмад багш Сангийн Цэвэрхүү

17:40 Оройн зоог /хотоос ирсэн төлөөлөгчид/

19:00 Төрбатын Алтаншагайгийн МУСТА цолны мялаалга.
“Ерөөл дүүрэн амьдрал” уран бүтээлийн тайлан тоглолт Богд сумын Соёлын ордонд

2025.05.03 Бямба гараг

Байгаль шинжлэлийн хурал: Богд сум анх байгуулагдсан Цутгалангийн адагт

Хурлын дарга: Д.Даш МУБИС-ийн Газарзүйн тэнхим, Доктор, профессор
Хурлын нарийн бичиг: Чагнаадоржийн Рэнцэнханд ШУТИС-ийн ГУУС-ийн докторант

10:00 Ц.Сэр-Од доктор (Ph.D), Д.Даш проф, Г.Ууганбат - МУБИС-ийн Газар зүйн тэнхим.

“Богд сумын ландшафт - газарзүйн онцлог”

10:20 Ц.Нямбаяр, Ц.Батсайхан, Б.Буянтогтох, Г.Болдбаатар – ШУА-ийн Одон орон, геофизикийн хүрээлэнгийн Газар хөдлөл судлалын салбар

“Их Богдын хагарлын геофизикийн нэгдсэн судалгаа”

10:40 Э.Энхтайван, М.Одончимэг, Д.Энхжаргал, О.Баатархүү, Б.Ариунсанаа
АШУУИС, Био-Анагаахын сургууль, Бичил амь судлал, халдварын сэргийлэлт, хяналтын тэнхим

“Липосомд суурилуулсан антибиотикийн үр нөлөө”

11:00 Сандагдоржийн Сайханбаяр – Талын эзэн ХХК-ийн Гүйцэтгэх захирал
“Нутгийн онцлогт суурилсан аялал жуулчлалын хөгжлийн боломж:

Брэндинг ба аялал жуулчлал”

11:20 Иш-Осорын Ниндэвгөмбо – Монгол Улсын Зөвлөх геологич, Баянхонгор аймгийн Геологи Гидрогеологийн экспедицийн дарга асан

“Баянхонгор аймгийн Богд сумын геологийн тогтоц”

11:40 Ж.Цэвэржав. Монгол Улсын гавьяат багш, ШУТИС-ийн Геологи, Уул уурхайн Сургууль.
Доктор, профессор,

Чагнаадоржийн Рэнцэнханд Худалдаа аж үйлдвэрийн танхимын эксперт, докторант.

“Баруун бүс нутаг дахь газрын төсны салбарын үйл ажиллагаа”

12:00 Майнбаяр Б. Палеонтологийн хүрээлэнгийн Палеозоологийн салбарын эрхлэгч
“Баянхонгор аймгийн нутаг дахь эрт цагийн амьтан ургамлын судалгааны тойм”

Хурлын хаалт:

- Соёлын төвийн эрхлэгч Г.Тунгалаг
- Дашзэвэгийн Түмэн Шинжлэх ухааны доктор, профессор
- Хурлыг хааж Богд сумын Иргэдийн Төлөөлөгчдийн Хурлын дарга Б.Анхбаяр

Чөлөөт аялал, Орог нуурын зах, Элсэн гээг, зураг авалт
Давхрын талд морины уралдаан үзэх, малчны хотонд зочлох

17:00 Сумын төвд ирж амарна.

2025.05.04-ний өглөө 07:00 цагт Улаанбаатар хот руу хөдөлнө.

(2) 2025年8月のツェルゲル訪問(8月13日から30日まで)

(2.1) 東ボグド山ツェルゲルへ

初めてモンゴルを訪れた1989年から共同調査に出かける時は、バスやジープなどに乗り、交通手段の心配をすることがなかった。その後、筆者が個人で長く調査を続けることができたのは、夫が車の整備士で、道を覚え、安全に運転してくれたことが大きい。コロナ禍が終わって、なかなかツェルゲルに行けなかったのは、夫が日本で務めるようになり、車と運転手がいなかったからだ。ゴビ山岳地帯は岩が切り立っていて、タイヤの消耗が激しい。知人に車を出してくれと容易に頼めるような道路状況ではない。

しかし、5月にはウランバートルからボグド郡まで、学会会議の事務局がチャーターしたバスに乗り、ボグド郡までは10時間辛抱すれば行けることがわかった。また、ボグド郡の中心地に就けば、簡易宿泊所もあるが、泊めてくれる東ボグド山の知人宅がたくさんあることもわかった。郡の中心地まで来れば、タイミングさえ合えば、東ボグド山まで連れて行ってくれる知人がいる。なんとか夏には、バスでボグド郡まで来て、東ボグド山を目指したい。もし、行けなくても、郡の中心地の知人を訪ねることができると思った。

また、今回は、文学部の2年生と2人旅であった。筆者が担当する共通教育科目の科目で、映画「四季 遊牧」を見て、実際に東ボグド山ツェルゲルを見てみたいと思い、特別外国語モンゴル語の授業を受け、準備してきた学生である。そのため、できるだけ、映画の登場人物に会えるよう、ルートを考えた。

5月の訪問時には、ウランバートルからボグド郡まではバスが週に1回は走っているからなんとなかなよと聞いたが、その言葉を信じ、実際には、その通りになった。なんとなかなよということの背景には、要所で、キーパーソンが助けてくれる、そういうネットワークがあるということである。それは検索には引っかからない。次の節からは、単なるルートや日程ではなく、お世話になった方、再会できた方、出会った方を記録しておきたいと思う。今回の訪問は、調査というよりも、5年ぶりに訪ねた筆者を受け入れてくれるかどうか、再会そのものが目的であった。

(2.2) ウランバートルからボグド郡まで

5月の学会のメンバーに、ボグド郡中心地の人々が参加している facebook のグループ Богд сум Хориулт に入れてもらって情報を集めたが、7月のナーダム、8月のホースマンフェスティバル⁴⁾が終わってからは公共バスの情報が途切れてしまった。困っていると、元ボグド郡長の O. ドラムドルジから、自分はボグド郡にいて、息子ムンフバトが迎えに来るので、その車に乗って一緒に来てはどうかとメッセージをくださったので、お言葉に甘えることにした。

筆者らは、ウランバートル市内の渋滞を避けるため、ボヤントオハー空港のそばに住む卒業生のアパートに泊めていただいていた。そのあたりはノミン・デパートが3つも、4つもあるほど、人口が集中し、9月1日の朝の通勤時間帯には、空港のゲート前まで渋滞の車の列が続いていた。8月末はモンゴル全土からウランバートルへ学生や学童が集まって来る。ボグド郡からウランバートルに帰るチケットを早く押さえておく必要があるので、<https://eticket.transdep.mn/> オンラインのサイトで

4) モンゴル国労働英雄 D. ゴンボジャブ記念ホースマンの祭りの第3回 "Адуучин - 2025" が8月7日に県中心地から北西にあるドルサフ谷で行われた。

調べてみたところ、ボグド郡とウランバートルのルートでは公共バスの情報がなく、バヤンホンゴル県からウランバートル行きのチケットを予約した。支払いは携帯電話を通じた決済になっているが、モンゴルの銀行の預金通帳を持っていないので、宿主に現金を渡して振り込んでもらった。ウランバートルではどんな支払いも電子マネー決済が主流になっているが、田舎で過ごすにはまだ現金が必要な時がある。

16日8時、ムンフバトの車で、ボヤントオハーからボグド郡に向かった。彼はボグド郡で生まれ育ち、遊牧民になろうとした少年期に筆者が写真を撮っていて、夏になると郡長の父を訪ねてくる人と覚えてくれていた。国立芸術大学に進学し、国営テレビ局のカメラマンとなり、今は独立しているが政府関連の撮影や独自の映像作りに取り組んでいる。ボグド郡へのルートを間違えることはないし、ゴビプロジェクトのフィルム写真の扱い方にアドバイスをもらうなど、願ってもないドライバーだった。

ボグド郡の中心地からツェルゲルには、東ボグド山の優秀遊牧民の故サムダンホルローの娘、シュレーに messenger で迎えに来て欲しいと連絡していたが、wifi が届かないところで夏営しているようで、既読のサインがなかった。筆者は自分の居場所を facebook にアップロードして、誰かの目に留まることを期待した。その頃、シュレーの息子で、東京に勤めているタムジッドが、故郷の東ボグド山ツェルゲルに帰郷していて、ちょうど東ボグド山からボグド郡、そしてウランバートルへ自家用車で帰る途中であった。facebook の筆者の投稿を見て、親に電話し、話を繋げてくれた。ボグド郡に到着した日は、郡中心地のドラムドルジ、ヨンドンダシの家で夕食をいただき、娘のボルマーの家に泊めていただいた。

翌日、8月17日の午後、シュレーとシャグダルが、東ボグド山を下りて、車で迎えに来てくれた。郡中心地の2人の家の中は、5月に訪れた時よりさらに美しくなっていた。まるで、ウランバートルの高級マンションのような内装だった。この夏は、100周年記念に向けて改装し、来客も多くなり、東ボグド山での家畜の仕事は一番下の息子のトゥグルドウルに任せ、搾乳は春に仔山羊を産まなかった母山羊5頭の搾乳に留めていた。出産しなかった母畜を別の仔畜をなつかせて搾乳することを хайдагшуулах ハイダクショーラフと言う。その母山羊が来年仔畜を産んだ時、搾乳できるようにする。一方、出産した方の母畜は、仔畜が乳を吸うので、乳は枯れず、仔畜は早く大きくなる。そうすると、カシミヤもたくさん取れる、とシャグダルが説明してくれた。そこでボグド郡設立100周年記念の“ИХ БОГДЧУУДЫН ТҮҮХ”を見せてもらい、それを持って、東ボグド山に向かい、一通り読むことができた。ロギオ(故トーフグイの妻)が後に「東ボグド山ツェルゲルの歴史の本を出したい」と語ったのは、この『イフボグドの人々の歴史』と言う本を読んだからであろう。この本については、また後に書くことにする。

(2.3) 東ボグド山ツェルゲルで再会した人々

東ボグド山ツェルゲルは東西が40km、南北が20kmと広い。17日の夜に到着したのは、ツェルゲルの東部のバガナリーン谷上で、郡の中心地から100kmのシュレーとシャグダルの夏営地であった。標高は2700mぐらいあったと思う。そこから南に向かうとバヤンリグ郡のハタンソードル山が見える。その夏営地には、末息子トゥグルドウルのオトルのゲルが立てられていて、23日まで滞在した。そこからシャグダルの運転で山上の夏営地と山麓の秋営地の遊牧民知人宅と一緒に訪問した。トゥグルドウルはもう24歳、一人前の遊牧民になっていて、来年には結婚しそうだ。革で頭絡や足枷を作っ

たり、古い鞍を修理したり、郡を代表する革製品の工芸家になっていた。

8月19日、故サンギダグワの娘バイガリの家に行くと、母ナツァグ(サンギダグワの妻)がバヤンホンゴル県からやってきていた。70歳を越えても、自分の足で歩き、記憶もしっかりしていて、筆者を覚えてくれていた。故サندانホルローの長男ガナと妻のボイナー、末弟バトバートルと妻のドルジドラムの住む東ボグド山頂の夏営地ウルグート谷上に行った。各家のヤクが山頂に集まり、ヤクの王国になっていた。バトバートルは県の優秀遊牧民として表彰されたと言う。8月20日にツェルゲルで最も東、ウブルハンガイ県ボグド郡との境を接するダイルガ谷の故サンギダグワの娘ドラムとオチルプレブの家、オチルプレブさんの母シャーズガイ(故トゥムルバートルの妻)の家を訪ねた。ドラムの一人息子エルヘムは、ウブルハンガイ県の中心地アルバイヘルに両親と住み、学校に通っている。この秋から8年生になるので、親戚に預けて、夫婦は家畜を飼うために、東ボグド山に帰ってくるつもりだという。8月21日にガシオン谷口のダンバ(バヤンホンゴル県中心地在住)の長男サンバガが娘と夏営し、チョロート谷口にはダンバの次男ガナが夏営していたが不在、どちらも放牧に出ていた。イフナリーン谷口にはドルジホルローとナラー(故トーフグイの妹)、息子のアルタンホヤグが夏営していた。東ボグド山の南麓の砂漠性草原地帯にある秋営地アムナオスに故ドージャルガルの妻のツェグメド(故トーフグイの妹)と息子と娘が秋営していて、チャチルトには故スレンホルロー(故サندانホルローの妻の兄弟)の息子ツェンゲルと妻ムンフゲレルが秋営し、ハルハウツガイトには故ドージャルガルの息子チャンガイが放牧に出かけて不在、ザラーに秋営しているコクバートルさんは不在、故シャーズガイの息子セルオドも不在であった。9月1日の年度初め、新学期に向けて、郡や県の中心地移動が多い時期、また家畜にしっかり体力をつける放牧に忙しい時期であった。筆者は、シュレーとシャグダルの冬営地のイヘルで東ボグド山最後の夜を過ごした。

こうして書いてみると、亡くなった方が多いことに気づく。

(2.4) ボグド郡の中心地で再会した人々

翌日、22日シュレーとシャグダルの車でボグド郡の中心地に行き、シュレーが営業する洋服屋さんを見学し、トゥイン川に足と手と髪の毛を洗いに行った。そのあと、ロギオと故トーフグイの娘で、女性で初めて、第4バグの長となったウルジーヒシグの家を訪ねた。すでに facebook のグループで情報を集めて、ボグド郡の中心地からバヤンホンゴル県の中心地に行く車と連絡を取ってくれていた。またそこで例の100周年記念の本『イフボグドの人々の歴史』をいただいた。ロギオはバヤンリーグ郡の牧民と結婚し、ハタンソーダルの近くに夏営する娘のナラントヤーの家に滞在していて、messenger で対面し、おしゃべりを楽しんだ。その日は、シュレーとシャグダルの家で泊めてもらった。翌日の運転手が出発時間を告げに、シュレーの家にやってきた。すると、郡の中心地でシュレーとシャグダルが住むアパートで隣同士だったことが会ってわかり、「トゥムルさんなら安心よ」とシュレーが太鼓判を押してくれた。また、バヤンホンゴル県ではバトツェンゲルとバドロシの家に泊まることになっていたの、県の到着場所にバドロシが迎えに来てくれたが、トゥムルとも知人であった。

(2.5) バヤンホンゴル県で再会した人々

23日、県の中心地に到着したが、バトツェンゲルは、次男サンギの車で、ウランバートルに行き、弟のフレルトゴーを見舞っているということだった。それで1991年から但東町(現在豊岡市)に研修

生として来日したボルドスフと facebook で連絡を取り合って、再会した。二人の子どもに、孫がいる。県を中心地を案内してもらい、トゥイン川の上流で足を洗った。お互いに年をとったことを確認しあった。但東町の山下や本田の娘さんに messenger で繋ぎ、対面で挨拶をした。

バトツェルゲルはタクシーの運転手、バドロシは枝肉を仕入れ、骨から外し、レストランの求めに合わせて、炒め用に薄切りにしたり、ポーズやホーショール用に細かく刻んだりして、お店に届けて生計を立てている。二人を訪ねて客の多い家で、この日もバドロシを訪ねてくる人は多かった。故ジグメッドルジの養女オルトナサンはツェルゲルの分校の教員で、その娘で、ドイツ留学中の学生オユンと夫が、ドイツに戻る前にと、挨拶に来ていた。ミャグマルスレンとナンジッドの息子テムジンとテルビシと三家族の孫、合わせて14人が私に会いに来てくれた。ミャグマルスレンは、バトツェルゲルの後にヘセグ長になった人で、夫婦とも獣医であった。県を中心地に近いウルジト郡に移住し、家畜を盗まれたり、騙されたり、いろんなことがあったが、今はナンジッドがバリアチという触診で病状を診断する仕事で成功し、有名になっている。その夜、8時過ぎ、ウランバートルからバトツェルゲルと三男のサンギ夫婦と子どもが帰ってきて、夕食を一緒に楽しんだ。そのあと、messenger を使って、バトツェルゲルが但東町でホームステイした奥田清喜と対面した。「小貫先生ともこうして対面して話したい」と述べていた。

25日、ウランバートル行きの長距離バス停までバトツェルゲルとバドロシに送ってもらい、8時にバスに乗った。道中2回の休憩、21時過ぎのウランバートルのドラゴン長距離バスセンターに到着し、バトツェルゲルの次女ハンドの夫に迎えに来てもらい、一泊泊めていただいた。

東ボグド山からボグド郡中心地は100km、ボグド郡中心地から県中心地は130km、そこからウランバートルまで700km、人と人のつながりに助けられて、2週間の旅を実現することができた。

(2.6) 1995年の伝説の人々

1995年のボグド郡設立70周年記念の年、筆者はゴビプロジェクトの事務局員のバヤラーに付き添われて、ツェルゲルに行ったことがある。ウランバートルからバヤンホンゴル県都まで国内線の飛行機で、バヤンホンゴル県からボグド郡までトラックで、ツェルゲルに到着した。特に、ボグド郡―ツェルゲル間の道中は、ゴビプロジェクトの運転手が日産パトロールを運転すると、70kmの道のりが45分で到着できる距離と時間の感覚であった。

しかし、70周年記念ナーダムが終わった翌日、筆者は、ツェルゲルに帰るシーレブのトラックの荷台に乗せてもらって東ボグド山に向かった。ここから「70周年の伝説」が始まる。トラックの荷台には、シーレブ家、そこにはミャグマルスレン家、フレルトゴー家、サンギダグワ家、バトジャルガル家が家族ぐるみで乗り、男性たちはほどよく酔っ払っていた。月の美しい夜だったが、道中、知り合いの家があれば、そこで降り、挨拶し、出された酒を飲み、ケンカが始まる、ということを繰り返した。ボグド郡の中心地を18時に出発したトラックが、東ボグド山のツァーガン・シュージに夏営するバトツェルゲル家についたのは、3時であった。一行は、皆、ゾンビみたいな体の動きで、トラックを降り、バトツェルゲル家のゲルの中に入って行った。その時、バトツェルゲルは、筆者をゲルの中に入れず、「今からいろんなものを見るから、今日はトラックの運転席で寝なさい、」と言った。筆者は、恐怖と好奇心を抱えながら、助手席で横になり、深い眠りについた。翌朝、乳製品を作る小さなゲルの煙突から煙が上がっているのを見て、バトツェルゲル家が起きていることがわかった。みんなが入っ

ていった母屋のゲルのドアを恐る恐る開けてみたら、ゾンビだった人たちが円になって座り、乳茶をすすっていた。髪は血の塊で赤黒くなっていたり、白いTシャツの肩や胸には赤い雫が付いていたり、それでもおとなしく座って、乳茶をすすっていた。筆者は1ヶ月、単独でツェルゲルに滞在する予定で来たので、その初日に、こんな凄惨な朝を迎えるとは思わず、愕然とした。しかし、主人の席に座るバトツェルゲルがよく眠れたか？と笑顔で大丈夫だよ、と安心させ、小さい方のゲルでお茶を飲みなさいと促してくれた。そのゲルには、バドローシと子どもたちがいた。避難して過ごしたのだろう。バドローシは、座って、お茶を飲みなさい、と安心させるように笑ってくれた。

ボグド郡100周年記念の年に、この「70周年の伝説」の話をして、どの家でも大笑いになった。この話の中に出てくる遊牧民の中で、シーレブが亡くなった後、次の世代はバヤンホンゴル県やウランバートルに移住し、ミャグマルスレン家は、県の北部、ウルジート郡に移住し、フレルトゴー家は東ボグド山の北側平原に移住し、バトジャルガル家は、妻のトゴーチが亡くなった後、夫のバトジャルガルは県の中心地に移住し、子どもたち世代が郡や県に住んでいる。遊牧民として東ボグド山で遊牧を続けているのは、サンギダグワが亡くなった後、娘のバイガリとドーガの2家族である。70周年の伝説を通じ、30年の年月が過ぎ、ずいぶん変わったことをシェアすることになった。そのことがかえって、今、記録しておかないと、忘れてしまうことがたくさんある、という気持ちも共有することになった。

こうして分かったことは、2025年現在、東ボグド山ツェルゲルには、50戸足らずの遊牧民が住んでいること。筆者の知る最も多い戸数は、コロナ禍前の110戸であった。ただし、1980年代にバトツェルゲルがヘセグ長として赴任した年は、東ボグド山には26家族しか住んでいなかった。また、ツェルゲルに残っている遊牧民は、親の世代がネグデル時代から優秀遊牧民だったダンバ家、サンダンホルロー家、サンギダグワ家で、子の世代だけでなく、孫の世代も積極的に牧畜経営を発展させている。心技体のどれも優秀な遊牧民が頑張っている。

ただ、牧民戸数の多い年は、一つの谷の入り口に3戸の家族がホタアイルを組んでいて、家族の間で分業したり、子どもたちはホタアイルの中で役割を果たしていたり、補い合って暮らしていた。それが、1戸で暮らすとなると、できることはするが、できないことは無理してやらない、ということになる。例えば、母親一人で搾乳できる山羊の数は100頭が上限となり、郡の中心地の学校で学ぶ子どもがいないと、母親も早々に搾乳を切り上げて、中心地に移らないといけなかったため、ミルクは仔山羊の飲み物となる。しかし、その方が、仔山羊が早く大きくなり、体表面積が大きくなり、カシミヤがたくさん取れるという考え方も生まれる。乳酒を蒸留する家も少なくなり、その分、アーロールの甘みやコクが増し、高く売れていいという考え方も生まれていた。この夏、山羊のアーロールは、ボグド郡で1kgあたり60,000トゥグルグの高値がついたと言う。1980年代後半から農牧業ネグデルの生産組織ヘセグ、ソーリによる分業ではなく、伝統的なホタアイル共同体を復活させ、五畜を飼い、家畜の恵を余すことなく生活の恵みとして利用したいという流れがあったが、就学児童のいる世代で母親は中心地に、父親は遊牧地に分かれて暮らし、子どもが大学に進学し、留学し、就職し、親としての役割を終えた親世代の内、家畜を飼う能力の高い人々が東ボグド山に残っている。遊牧民として残った子どもも、20代になっている。

シュレーは、首都にも、県都にも、自分たちには仕事がない。翌日から何を食べて暮らすか、そのストレスに潰されそうになるぐらいなら、家畜を飼って暮らした方が絶対にいいと考えている。働き

さえすれば、遊牧地にはなんでもある。冬営地を3つ持っている。一方、年を取り、膝が痛み、体に自信が持てなくなった時のために、郡中心地で暮らす方法も手探りし、アパートや土地を3ヶ所持っている。末っ子が来年結婚することを契機に、新しい人生が始まりそうだ。

図6 『イフボグド山の人々』



(2.7) ボグド郡設立 100 周年記念『イフボグド山の人々』について

この『イフ・ボグド山の人々』という本は、2025年のボグド郡設立100周年記念ナードム前に発行された。元郡長のO. ドラムドルジとSh. ダグワが監修し、新しいところは若い人たちが執筆したものである。

すでに1995年にO. ドラムドルジが監修した“Баянхонгор аймгийн Богд сумын түүхэн замнал (バヤンホンゴル県ボグド郡の歴史の足跡)”, 2005年にS. セデド、Sh. ダグワ、G. ハヴチョールらが監修した“Баянхонгор аймгийн Богд сум (バヤンホンゴル県ボグド郡)”という本があり、それを元に、最新の歴史の研究の成果、新しい経済活動、そして、個人の回想を加えたため、389ページに及ぶ。

内容は、次の目次が示すように、ボグド郡の自然条件、歴史、築いてきた社会システム、ボグド郡出身の功労者を紹介している。

『イフボグド山の人々』の目次 (翻訳)

序章	私たちが育んだ大地
	故郷の大地
	山々 (イフボグド山、ジャランボグド山、バガボグド山など)
	トゥイン川の3つの支流の流域
	谷や盆地 (モンゴリン・ホーロイ ザグの砂峽など)
	平野
	砂丘

(目次つづき)

	河川
	湖
	地質学調査の歴史
	地殻変動の歴史
	地下資源
	気候、四季の特徴
	土壌
	在来植物
	野生動物
	歴史的な文化遺産
	伝説と歴史
	石碑やオボー
第二章	ボグドの人々の史跡
	略年表
	人々の歴史、系統
	略史
	モンゴル帝国時代
	ラミン・ゲゲーン旗の時代
	人民政府の時代
	社会主義時代の行政
	民主化以降の行政
	ボグド郡議会
	ボグド郡行政、郡長
	5つのバグ
	党、国家組織
	若者の組織
	労働組合
	女性組織
	高齢者の委員会
	牧畜
	家畜数
	牧民
	国家的功労牧民
	県優秀牧民
	郡優秀遊牧民
	自営遊牧民の歴史
	教育、文化、健康、スポーツ組織
	医療
	教育
	義務教育学校
	幼稚園
	保育園と幼稚園
	文化センター
	文化芸術の名人
	体育、スポーツ

(目次つづき)

	モンゴル相撲の力士
	高名な競走馬の調教師
	国立社会サービス部門
	獣医院
	郵便と通信
	気象観測所
	エネルギーセンター
	天体観測所
	商業、工業、社会的サービスを行う私企業
	ボグド郡商工組織
	ハーン銀行
	国立銀行
	ドウルブン・ボグディン・ボヤン ホルショー（貸付業）
	オログ・ノーリン・ヒシグ ホルショー（カシミア原毛販売）
	テルゲーン・ボグド・ハイルハン社（乳製品加工）
	国際交流・国際共同
第3章	イフボグドの誇るべき人々
	イフボグドの著名人
	国家的英雄、軍人
	国家的労働英雄
	国家的文化功労者
	国家的名誉ある受勲者
	国家に貢献した政治家
	国家ナーダム名誉ある力士
	国、県の優秀遊牧民
	学者、研究者
	国家の助言者
	軍人、警察等で貢献した人々
	国家公務員の貢献者
	芸術、文化、スポーツの著名人
	仏教者たち
	現代の先端を行く専門家たち
	国家勲章受賞者
	労働英雄受賞者
第4章	回想
	ウランバートル市のボグド郡出身者の会
	ボグド郡のラクダ飼い
	東フルメンの馬飼い
	ジャランボグド山とドラーンボグド山の山羊飼い
	ヤク乳加工グループの人々
	ボグド郡のバレーボールチーム
	地震災害
	ボグド郡をリードした先人たちの回想
	ボグド郡の歌や詩
	文献

ボグド郡の概要だけでなく、それぞれのテーマの関係者から回想を集め、掲載し、その時代に社会を支えた人の声が聞こえてくるよう構成されている。また、自然科学者がボグド郡で行った研究調査

の成果、ボグド郡が持っている資料、最初に紹介した『ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部エルデネ・バンディド旗ラミン・ゲゲーン・シャビとバヤンホンゴル県ボグド郡』学術会議の報告書とも重なるところがあり、近年の社会科学の成果も取り入れている。このように網羅的に、まとめ上げるには大変な苦勞が想像できる。回想の書き手の選定も難しかったと思われる。

また、バトツェルゲルがホルショーを設立した功績を紹介するところがあり、東ボグド山ツェルゲルにホルショーが支える分校を設立した時のオルトナサン先生の回想があり、国際交流のところには但東町の本田重美とボグド郡長が握手をする写真があり、ゴビプロジェクトがボグド郡100年の歴史に刻まれてうれしく思った。

この本をもう少し簡略にし、モンゴル語2年生の購読の教科書を作れば、モンゴルの地方の地域史を理解する基礎となるだろう。

しかし、東ボグド山ツェルゲルの人々は、物足りないようであった。その理由を推察するに、第一に、ボグド郡には、4つのボグド山があり、ボグド郡で最も標高が高く、中央に座するのは確かにイフ・ボグド山である。その次に高い東ボグド山は、地図上では、バガ(小さい)・ボグドという名前であるが、地元の人は、大小で区別して呼ばず、イフ(大きい)・ボグドを西山、東ボグド山を東山と呼んでいる。東ボグド山の西半分はボグド郡に、東半分はウブスハンガイ県のボグド郡に含まれる。郡の中心地からモンゴリン・ホーロイという砂地のザグの茂みが砂峽となり、物理的な障害となっている。その向こうに頂上から半分の姿が見える東ボグド山は、中心地にお尻を向け、東を向いているように見える。実際に、東ボグド山に暮らす人は、南のバヤンリグ郡、北のウブスハンガイ県のボグド郡、バローン・バヤン・オラーン郡の方が近く、バヤンホンゴル県の中心地より、ウブスハンガイ県の中心地アルバイヘルに近い。ボグド郡に所属しているが、郡の中心地に頼らず、自立した風土がある。同じボグド郡に住んでいても、西ボグド山より、東ボグド山にアイデンティティがあるのだ。

第二に、ボグド郡は6つのバグに分かれるため、東ボグド山ツェルゲルについての記述は、6分の1になる。「この本のためにカンバしたけれども、自分の親のことが載っていない。」「載っていても、名前だけである。」「郡で表彰された自分の子どもが載っていない」というような不満を聞いた。しかし、

写真4 ボグド郡の中心地から見た東ボグド山の姿



筆者撮影

図7 バローン・バヤン・オラーン郡から見た東ボグド山の姿



出所 <https://www.facebook.com/photo?fbid=571492614983402&set=a.571492648316732>

それはボグド郡として編集される限りは仕方のないことだということは理解していて、むしろ、東ボグド山に生きた人々の歴史を別の本としてまとめたい、という気持ちが高くなっていた。

ボグド郡100周年記念の本が出たことで、もっと自分たちの東ボグド山に根づいた歴史を記録しておきたいと思うようになったのである。

(2.8) チャグナードルジとドラムの娘センジッドによる Ургын бичгийн ном 家系の2冊の本の出版

5月のボグド郡での学会議の事務局を担当したチャグナードルジの娘センジッドは、2022年に父チャグナードルジの父母の2つの家系について書いた “Бидний өвөг дээдэс ГАНЖУУРЫНХАН, НАНЖИМЫНХАН”

図8 2022年の父方の家系の本
“Бидний өвөг дээдэс ГАНЖУУРЫНХАН,
НАНЖИМЫНХАН”

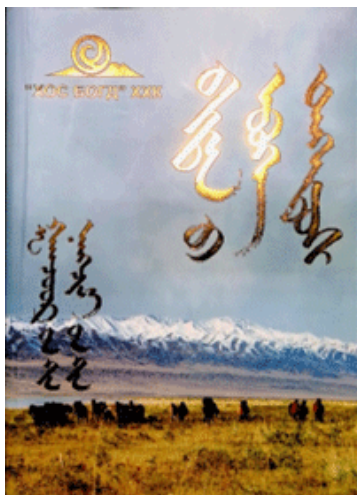
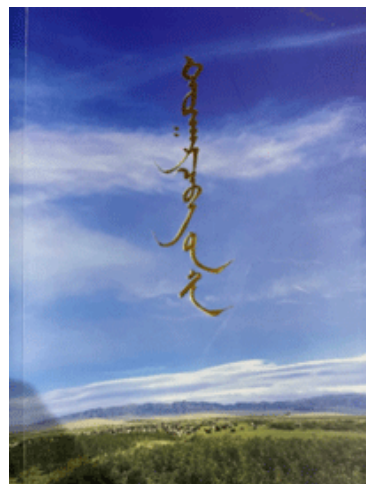


図9 2023年に出版された母方の家系の本
“ДУГАРЖАВЫНХАН”



НАНЖИМЫНХАН”、2023年に母ドラムの家系について書いた”ДУГАРЖАВЫНХАН”という本を出版した。

2022年の父方の家系の本“Бидний өвөг дээдэс ГАНЖУУРЫНХАН, НАНЖИМЫНХАН”は、2018年にチャグナードルジさんが書き始めた内容を。前書きによると「1870年から2022年(150年)にかけて生きた9世代、チャグナードルジの父方のガンジョールー族には1580人、母方のナンジム一族には4680人、合わせて6260人の名前」⁵⁾が登場する。492ページに及ぶチャグナードルジ族の「秘史」と言えるだろう。

チャグナードルジの祖先となる母方のナンジム一族を見てみよう。この本に書かれた第一世代をナンジムとすると、ナンジムにはドルジヴァーンダンを含む5人の第二世代がいて、ドルジヴァーンダンには、ツェデンを含む5人の第三世代がいて、ツェデンには1893年に生まれたトゴーを含む8人の第四世代がいて、トゴーには1922年に生まれた娘イバを含む4人の子ども第五世代がいて、イバはイシ・オソルと結婚し、1944年生まれの(この本を発行したセムジドの父)チャグナードルジ、1951年生まれの娘ヨンドンダシを含む5人の子供を含む第六世代がいて、チャグナードルジには、セムジドを含む6人の子どもを含む第七世代が5月のボグド郡の学術会議を組織し、チャグナードルジの孫の第八世代が会議をサポートし、さらにひ孫の第九世代が生まれている。

ガーンジョールの一族からチャグナードルジの父方を見ると、ガーンジョールにはハルザンやヴァーンチグラ5人の第二世代がいて、ヴァーンチクには息子ゴンチグを含む3人の子の第三世代がいて、ゴンチグにはイシ・オソルや僧になったレンドーを含む4人の子どもの第四世代がいて、イシ・オソルはナンジム一族のイバと結婚し、チャグナードルジやヨンドンダシらが生まれる。ヨンドンダシの夫が長年郡長を務め、分校設立に協力してくれたO.ドラムドルジである。

ガーンジョールの第二世代のハルザンにはツェレンドラムら4人の第三世代がいて、ツェレンドラムには、ドルジンとトゴーという2人の第四世代がいて、ドルジンにはサンギツェヴェグを含む5人の第五世代がいて、第四世代のトゴーとヤンジンには、第五世代のトーフグイ(妻がロギオ、末娘がウルジーヒシグ)、トゴーとジャンバルの子がソソル、ビャンバスレン、ナランゲレル、ツェヴェグミド、ゲレルで、従兄弟同士であることがわかる。チャグナードルジ家とサンギツェヴェグ家、トーフグイ家、ジャンバル家の娘たちは、ガーンジョールが共通の祖先となることがわかる。

2023年に出版された母方の家系の本“ДУГАРЖАВЫНХАН”に登場する人名の数は書かれていないが、312ページの本となっている。

ドガルジャブにはオチルを含む5人の子どもの第一世代がいて、オチルにはジャンバを含む10人の第二世代、ジャンバにはドラムを含む8人の第三世代がいる。ドラムは、チャグナードルジと結婚し、6人の子どもの含む第四世代、ドラムの孫の第五世代、ひ孫の第六世代が生まれている。

ドガルジャブの第一世代のダンバ、その子の第二世代ナンギドマー、その娘のジャンパハンドがB. トウングと結婚し、ジャンパを含めた11人の子どもの第4世代がいる。T. ビャンバーは、ボグド郡の校長を務め、分校設立にも協力してくれた人である。その妻、バザルは、ナンジムの子ドルジヴァーndan、その子ツェデン、その子トゴの養女サンギツェレンの娘になる。イバとサンギツェレンは兄弟となり、チャグナードルジとバザルは従兄弟となる。

ゴビプロジェクトの社会班は、東ボグド山ツェルゲルの人々の横の繋がりがわかる家系図を作った

5) P.10

ことがある。この2冊の本は、家族だからこそ、書き残すことのできる家系図の本で、一般に販売される本ではない。そこには、写真がふんだんに使われていて、これから先の子孫に残すものである。2つの一族の秘史と言えるものである。

また、家族に僧侶がいる家庭から、高等教育を受ける子孫が生まれ、大学を出て、教員や郡長や校長になる人材が生まれていることがわかる。自分たちは、ラミン・ゲゲンの弟子たちであること、彼らが東ボグド山ツェルゲルの遊牧民がホルショーや分校を設立しようとした時、積極的に支援した人たちであることがつながって見え、非常に興味深かった。

この2025年のボグド郡訪問で知ったことは、2022年からチャグナードルジの娘センジドが家系の本を出版し、2025年に5月にボグド郡で百周年記念の学術会議を開き、7月にボグド郡から百周年記念の本が出版され、今、東ボグド山ツェルゲルの人々は自分たちの歴史を本にしたいと考えている。地域の人々から地域研究の基礎となる本が生み出そうとされている。O. ドラムドルジが述べたように、新しい段階に入ったと言えるだろう。

（3）『東ボグド山の家族の秘史』の本、家族版と出版用

筆者は『モンゴル研究』に東ボグド山ツェルゲルにおける調査報告を書いてきたが、その後、投稿しなくなった。それは、あまりにも家族間の個人情報を知り過ぎてしまったこと、名前を仮名にしたとしても、ツェルゲル以外の地域で定点観測をしていないため、誰のことを書いているか、翻訳して読めばわかるようになった。翻訳も機械で容易にできるようになり、『モンゴル研究』はインターネット上で公開されるため、子や孫の若い世代が読めるようになった。このため、見聞したことを書くことが難しくなった。

しかし、今年の訪問で出会った人々は今書き残す必要があると考えていて、彼らとともに、各家族に残す本と一般に出版する本を分けると、本にすることができるという感触を得た。

ボグド郡が出版した百周年の本は、ボグド郡という社会がどうできてきたか、というところに力点がある。例えば、ゾドのような自然災害でどうなったか、それをどう乗り越えてきたか、断念したか。市場経済の波がどのように家畜経営に影響を与えてきたか。家畜をたくさん飼えば、功労者として表彰され、記録に残る。しかし、特に、規模拡大に興味を示さず、誰よりも豊かな暮らしをしようと思わず、飄々と生きてきた人もいるし、酒に溺れた父を見て、しっかりした子どもたちが育つ家もあるし、断酒に成功し、50頭程度の少ない家畜を飼いながら人生を満足している人もいる。山岳砂漠の厳しい自然条件で、ネグデル解体後は牧畜業を保護するネットがない状態で、そこで生き続けることは、功労に値する。また、東ボグド山の故郷を離れ、県や首都や外国で暮らすようになった人々の心の中にも、この自然と社会がある。あの山岳砂漠の自然に根付いた、それぞれの歴史をまとめることは、筆者の義務であると考えた。

ゴビプロジェクトの調査においても、その家の戸主のライフヒストリーは、30年遡っても営地の名前をはっきり覚えていて、そこで何があったか、どう暮らしたか、思い出を話してもらえた経験がある。遊牧民の歴史の記憶のフォーマットは、四季の営地とともにある。そのような営地利用、家族、災害、家畜数、家財道具などを聞き取っていくことがまず急がれる。

また、この報告で「故」という文字をたくさんつけたように、本人にはもう聞き取ることができず、次の世代、子どもたちから見た親の世代を語ってもらう必要がある。郡や県、首都に移住した子ども

達からも聞き取ることができるだろうし、facebook を通じて、原稿を送ってくれることもできるだろう。

モンゴル国立大学にオーラルヒストリーラボができることになり、来年の春、オープンする。昨年の冬、デルゲルジャルガル教授が来日した時に、ゴビプロジェクトが収録したカセットテープをお渡しした。それをデジタル化し、社会科学研究者で聞いたところ、現在とは違う話し方で、地方の首長や遊牧民が話していることで、貴重な資料だと評価を得た。例えば、ボグド郡の説明は、最初の郡長のO. ドラムドルジが話しているので、それは過去のものではなく、今、ウランバートルに暮らしている本人と共に聞くことで、当時のことを共有し、共に研究することができるだろう。まさに、今の数年は、それが可能だと思われる。

また、ゴビプロジェクトが保管している写真があり、2001年以降はデジタル化したが、1989年から2000年までは、フィルムで保存している。それをデジタル化し、共有する必要がある。遊牧民の家庭には、現像して、プリントして、お土産として差し上げたが、今は、誰もがスマートフォンを持っているので、デジタルで欲しいという要望が強い。

これらのことを考えて、各家族の秘史と印刷用の本の2種類を作るため、来年から取り組みたいと思う。

(いまおか りょうこ)